

彦根市総合教育会議 会議録要旨

平成 30 年度第 1 回彦根市総合教育会議	
日 時	平成 30 年 7 月 3 日（火） 午後 2 時 30 分～午後 4 時 10 分
場 所	彦根市民会館 第 3 会議室
出 席	彦根市長 大久保 貴 教育長 善住 喜太郎 教育長職務代理者 小松 照明 委 員 本田 啓子 委 員 永瀆 隆 委 員 西川 孝子
欠 席	なし
議事次第 1 議題 (1) 平成 30 年度のスケジュールについて (2) 英語教育について ①本市の英語教育について ②講演「大津市の英語教育について」 講師 彦根市立城西小学校 教諭 宮塚 江理 氏 2 その他	

○企画振興部長 本日はお忙しい中、ご出席賜りましてまことにありがとうございます。ただいまから平成 30 年度第 1 回彦根市総合教育会議を開催させていただきます。

本日の司会を務めさせていただきます、企画振興部長の馬場でございます。どうぞよろしく願いいたします。それでは、失礼して着席させていただきます。

総合教育会議は、「地方教育行政の組織及び運営に関する法律」により設置されていますもので、本日の総合教育会議は、公開により開催させていただきます。

本日は議事次第に沿いまして、講演、協議等をいただく予定となっておりますが、16 時過ぎを目途に終了したいと考えておりますので、本日の会議が円滑に進行できますよう、よろしくお願い申し上げます。

それではまず初めに大久保市長から、平成 30 年度の総合教育会議を進めていくに当たりまして、ご挨拶を申し上げます。

○市長 皆様、改めまして、こんにちは。大変お暑い中、第 1 回教育総合教育会議にご参加いただきましてありがとうございます。

この総合教育会議を設置いたしまして 3 年ということ、市長部局と教育委員会との意思疎通を十分に図りながら、彦根市の教育環境の充実に一步一步、歩みを進めていると、

私自身は思っております。今年もどうぞ、皆様の忌憚ないご意見を頂戴して、さらなる環境改善、施策の充実にご協力をお願いしたいと思っております。

今日は城西小学校の宮塚先生にお出ましいただいて、英語教育についてご講演をいただくということでございますが、英語教育の小学校義務化に向けて、準備を進めていただいているわけでございます。早期の外国語習得というのは、方法によっては、非常に有効なものだと思っております。重要な課題でございますので、今後とも、力を合わせながら、さまざまなツールを使いながら、外国語教育の環境の充実に努めていければなと思っております。

限られた時間でございますが、どうぞよろしく願いいたします。

○企画振興部長 ありがとうございます。

それでは、議題に従いまして進めさせていただきます。

最初に、(1)平成30年度のスケジュールにつきまして、事務局より説明いたします。

○事務局 それでは、平成30年度のスケジュールについて、資料1と書かれたものをご覧ください。

今年度の総合教育会議につきましては、本日を第1回といたしまして、10月、12月、そして、年が明けまして、2月の計4回の開催を予定しております。

この4回以外にも緊急の事案が生じた場合は、臨時で会議の招集をさせていただくことがございますのでご了承ください。

各会で取り扱う議題につきましては、第2回につきましては、全国学力・学習状況調査の結果を受けてということで開催させていただきます。

第3回は、次年度の予算重点事項についてを予定しているところでございます。

また、第4回につきましては、平成31年度のスケジュールと働き方改革をテーマに、皆様にご協議、ご意見を頂戴できればと考えているところでございます。

私からの説明は、以上となります。よろしく願いいたします。

○企画振興部長 ただいま、平成30年度のスケジュールにつきまして説明をいたしました。今後の状況で内容が変更になることがあるかもしれませんが、今ほど説明申し上げたスケジュールで進めてまいりたいと思っておりますが、よろしいでしょうか。

(異議なしの声)

○企画振興部長 ありがとうございます。ご了承いただきましたので、平成30年度は、今ほどご説明いたしましたスケジュールに基づきまして、進めさせていただきます。

それでは、続きまして、（２）英語教育についてに移らせていただきます。

まず、本市の英語教育につきまして、ご説明申し上げます。

○学校教育課主幹 お手元の資料２をご覧いただきたいと思います。

小学校外国語活動・英語教育についての資料に基づいて、ご説明をさせていただきます。大きく４点のお話をさせていただきます。

まずは、１点目です。

小学校英語教育（外国語活動）のこれまでの経緯と今後の計画というところで、大きな概要の計画とこれまでをお話させていただきます。

左端にあります２７、２８、２９、これが年度を表しております。教育特例校数とございますが、これは、教育課程の特例校の数でございます。平成２７年度から、教育課程を特別に英語教育を交えて構成していくということで、市で推進してまいりました。

平成２７年度には、２校。平成２８年度には、９校が新たに加わりまして、合計１１校。平成２９年度には、新たに４校が加わりまして、合計１５校。平成３０年度、１５校ということでございます。

平成３１年度、平成３２年度については、ご覧いただいたとおりですが、平成３２年度からは、新教育課程が実施されるということでございます。この年度の系列に従いまして、市の事業、取組について、次の枠で説明させていただいております。

まず、今申し上げました教育課程の特例校の推進を続けております。平成２８年度には、イングリッシュコンテストを開始いたしました。参加校１２校です。商工会議所の協力を得て、開始をすることとなりました。

平成２９年度には、１２月の校長会で、教育課程の移行措置が、平成３０年度、平成３１年度にスタートしますので、その説明。同じく１２月には、教務主任、特に、学校において教育課程を組むものでございますが、この分掌が教務主任でございますので、教務主任に対して、移行措置の説明を開かせていただきました。

同じく、２月には、彦根市の英語指導計画の説明ということで、平成３０年度、平成３１年度の移行期間の年間指導計画等の説明をさせていただいております。同じく、２月に第２回のイングリッシュコンテストを開かせていただきました。参加校が９校でございます。

本年度ですが、平成３０年度には、１２月に新教育課程、これは、県教委主催によるところですが、新教育課程の説明会を開きまして、来年度は、英語科の教科書の採択を経て

年間指導計画を作成し、平成32年度には第3・4学年で35時間の外国語活動、第5・6学年においては、70時間の外国語活動がスタートするところとなります。

その英語のアシスタントとして、一番右端になりますが、小学校においては、平成27年度にICAと書いております。小学校ICA3人。これは、国際理解教育アドバイザーというものを雇用しておりました。インター・カルチュラル・コミュニケーション・アドバイザー（Inter・Cultural・Communication・Adviser）という名称でICAと称しておりましたが、3人の雇用をいたしまして、英語教育のアシスタントをしておりました。

平成28年度からは、ALTということで、アシスタント・ラーニング・ラングエッジ・ティーチャー（Assistant・Learning・Language Teacher）ということで、7人のALTをインタラックという業者に委託をしまして、英語教育のアシスタントを委託しているところなのです。

平成29年度には7人、平成30年度には7人、平成31年度8人、平成32年度10人と、増員を債務負担行為によって決定しているところでございます。

その教育課程の特例校の英語活動・外国語活動ですが、1ページの一番下にありまして、第1・2学年では、毎日のビデオ視聴5分程度をしまして、年間17時間の英語学習。第3・4学年、第5・6学年につきましては、ご覧いただいたとおりの学習を進めております。裏面の2ページへ進みます。

特例校を設定いたしまして、その成果でございますけれども、成果としては、毎日短時間5分で同じビデオを1週間繰り返して視聴することにより、自然と英語表現が身につく、画面に合わせて自然と英語を話すことができるようになってきている。また、早い学年からネイティブ（母国語が英語）の先生の英語を耳にすることで、より美しい発音ができるようになってきている。平成32年度からの英語実施に向けて、児童・教師ともに学習環境が準備でき、円滑なスタートへつなげられる。こういったような成果がございましたが、一方で課題としましては、平成32年度からの新指導要領では、第1学年、第2学年における英語科学習は含まれておりませんので、これまでの本市の実践から、1・2年生での英語短時間学習5分のビデオ視聴の実施について、上学年への積み上げなどをするためには、教育課程の編成に工夫を要するところが課題でございます。

次、大きく2番でございます。ALTについてでございますが、先ほども申しましたとおり、本年度平成30年度は、インタラックへ委託をしまして、派遣人数7名となっております。派遣日数は、約200日ということでございます。

先ほども申し上げましたが、増員でございますけれども、平成32年度新指導要領の本格実施に向けまして、10名への増員を債務負担行為しているものでございます。

そのALTの条件でございますが、記載しておりますとおり、(1)から(6)の内容で、全ての条件を満たす者をアシスタントとして委託をしているということでございます。

現在、ALTに委託をしているプロフィールの一例として、学士号を取得し、オンラインの英語講師として英語指導の実績のある者を委託雇用しているというところでございます。このALTについての課題でございますけれども、3ページに移ります。

ネイティブの発音や表現を実感する指導の充実を図るため、また、教員の指導力向上を図るため、十分な指導・研修を考慮すると、さらにALTを小・中学校合わせて8人は増員する必要があるということでございます。

平成32年度には10名ということで、債務負担行為をしているのですが、十分に指導をする、十分に研修を重ねるというところでいきますと、なお8名の増員が求められるところでございます。

加えて、県費による英語専科教員の配置。これは、英語のみを指導する専門の教員という意味でございますが、その英語専科教員の配置の要望を県に求めていく。また、市費によって英語科専科教員を配置していくなど、今後、国語や数学科のような教員OBによる指導力向上のための英語科専門指導員の配置などによって、小学校教員の英語指導力をアップしていく、スキルアップしていく、そういったようなことも必要となってきます。

それから、次の黒丸でございますが、教員のスキルアップのために、市費による臨時講師を配置し、県の正教員、県費負担教職員がミシガン大学等々のタイアップで研修留学ということで生きた英語を学ぶ機会を設けるといったことによって、さらに小学校の教員のスキルアップも図れていくと考えております。

大きな3番目です。「中川録郎杯・彦根市小学生英語イングリッシュコンテスト」、先ほどの経緯の中でお話をさせていただきましたが、平成28年度より、市内の小学生を集めまして、希望する者にコンテストを開催しているというものでございます。

部門の1が、個人参加。部門の2が、チームで参加をいうことでございます。先ほどの表にもございましたが、参加校が平成28年度は12校、平成29年度は9校でございまして、今後の課題としては、さらに裾野を広げていく、参加校の増加を図ることが課題となっております。

最後、4点目ですが、市内の英語環境を整えることです。これは、学校だけではなかな

か難しいことですが、市内の掲示や標識などに英語表記を加えるということで、子どもたちの目に触れる機会が多くなる、それによって、英語を身近に感じる、そういった生活の中に英語表記があるということも望ましいかと思っております。

以上が、彦根市の英語教育、また外国語教育についての報告でございます。

○企画振興部長 ありがとうございます。今ほどの説明に対しまして、ご質問等ございましたら、お願いしたいと思います。

○小松職務代理者 この後、大津市さんの説明がありますが、それと共通するところがあると思います。時間的な制約もありますので、少し大津市さんの説明を受けて、いろいろな討論をしたらどうかと思います。まず、大津市さんの説明をしていただいて、彦根市の課題、比較も含めて、議論したいと思います。

○企画振興部長 ありがとうございます。そうしましたら、まず、講演を先にやらせていただいて、その後、合わせて質問ということでよろしいですか。

○小松職務代理者 はい。

○企画振興部長 ありがとうございます。では、講演に移らせていただきたいと思います。

本日は、英語教育につきましてより見識等を深めていただき、また、今後の取り組みに生かしていただくため、城西小学校教諭の宮塚江理様を講師にお迎えして、「大津市の英語教育について」と題しましてご講演いただきます。

宮塚様におかれましては、公私ともに大変お忙しい中、今回の講演の依頼を快くお引き受けいただきまして、誠にありがとうございます。

それでは、ご講演をいただく前に、少し宮塚様のご紹介をさせていただきます。

宮塚様は、この4月から城西小学校にご着任いただいております。現在、5年生の担任をなさっていらっしゃいます。城西小学校にご着任いただく前は、大津市の教育委員会におきまして、3年間英語教育の指導主事としてご活躍され、教育委員会と現場というこの2つの視点から、英語教育につきましてさまざまなお話を聞かせていただけると大変期待しております。

それでは、宮塚様、どうぞよろしくお願いたします。

○宮塚江理氏 失礼いたします。彦根市立城西小学校の宮塚江理と申します。よろしくお願いたします。本日は、このような機会を与えていただきまして、ありがとうございます。

この4月に大津市から彦根市に着任いたしました。平成27年度から3年間、先ほどご

紹介いただきましたように、大津市教育委員会の学校教育課で、主に小学校の外国語活動について担当をしております。その経験をもとに、また、彦根市の教員としてこれから彦根市の子どもたちのためにお役に立てればと思っております。本日は、大津市での英語教育について紹介をというご依頼をいただきましたので、ご参考になればと思います。

お手元の資料とスライドは全く同じでございますので、どちらかをご覧くださいながらお聞きいただきたいと思います。失礼して、座らせていただきます。

まず、大津市についてですが、大津市の小学校は、37校ございます。市立の中学校が18校で、計55校ございます。

大津市の英語教育が目指す子ども像として、中学校卒業時の子どもたちの姿として、大津の子どもたちは、大津の自然や文化をはじめ、自分の考えや伝えたいことなどを自信を持って英語で発信することができるというところを目指しております。

今年度と来年度が新学習指導要領の移行期間となりますが、大津市では、国の動きに先駆けまして、平成27年度から小学校1年生からの外国語活動とモジュール授業、いわゆる、短時間学習について取り組みを進めてまいりました。今日は、小学校の取り組みと、中学校の取り組みについて大きく分けてご説明をさせていただきます。

まず、小学校の取組につきましては、民間業者のノウハウとICTを活用して、子どもたちが英語に触れる機会を増やそうということをねらいといたしまして、オックスフォード大学出版局株式会社さんと連携をしまして、教材を提供していただき、また、教員研修等の委託を行いまして、教員の指導力の向上、それから、児童の英語力の向上に取り組んでまいりました。

平成27年度につきましては、37全ての小学校ではなく、まず、教材の選定や指導書の作成が必要になりましたので、5つの小学校をモデル校として、現場の先生方のご意見を聞きながら、また、子どもたちの反応を見ながら教材の選定と、指導書の作成を業者とともに行ってまいりました。

1年生から4年生は、45分の授業を年間8コマ。5・6年生は、移行期間前学習指導要領どおりの35コマを実施してまいりました。

全学年が、10分×週3回～5回×25週分のモジュール授業について行ってまいりました。年度の流れについては、次のスライドに移ります。

まず、平成26年度については、モデル校の5校の前に3つの業者による研究実践を行いまして、その次の年の平成27年度にプロポーザルを実施して、1つの業者に絞るとい

うことをいたしました。ですので、平成27年度の2学期から、小学校1年生からの外国語活動について実施をしております。

今年度、平成30年度につきましては、これまで5・6年生では、オックスフォード大学出版局のテキストを使ってきたのですが、新たに、国の We can! という副教材が出ておりますので、そちらを中心に使っております。後ほど、詳しく説明をさせていただきます。

外国語活動の時間数についてですが、昨年度、一昨年度と、全ての小学校で実施をしております。1年生から4年生については、45分の授業と10分間の短時間学習を合わせまして、年間24.6コマ分実施をしております。5・6年生については、51.6コマ分実施をしております。

モジュール授業の実施の時間帯については、学校によって異なりまして、朝実施している学校が、平成29年度につきましては11校。2・3校時の間、いわゆる、長休みといわれる時間の後に実施している学校が1校。お昼休みの後、掃除の前に行っているのが24校。帰りの会の前に行っている学校が1校ございます。学校の実態に合わせて時間帯を選んで実施をしていただいております。

小学校が使用していた教材についてですが、それまで、5・6年生については、『ハイフレンズ』を使用しておりましたが、それらも全て、オックスフォード大学出版局の教材に替えて進めてまいりました。

児童用のテキスト、1年生から4年生は『Let's Begin』といった教科書です。英語の文字も入っているものになります。これは、児童が1人1冊持てるように配置をしております。CDも付いていました。5・6年生については、『Let's Go』という教科書を使っています。

1年生から4年生は同じ1冊の教科書を使うのですが、ユニットが8つに分かれておりまして、ユニット1・2と3・4と2つずつ区切りまして、1年生は1と2、2年生は、3と4と進めていっております。

それから、テキストと全く同じ画面が映るようにデジタル教材を各教室に配備いたしました。先生方の一番の不安は、自分の発音に自信がないというところが大きかったので、デジタルで音声が出るような教材が欲しいということで、デジタル教材については全ての教室に配置をしております。

また、テキストをカラーコピーして拡大するというのも非常に時間がかかりますので、

教師用の大きな絵カード、それも1クラスに1セット、それと全く同じもののミニチュアサイズ、子どもたちが学習の際に使えるような児童用の絵カードも、1クラス8セット用意をいたしました。

それから、短時間授業につきましては、まだ、この当時は国の方から短時間学習と45分の授業のつながりについて言及をされているところがなかったものですから、特に、45分間の授業の内容を復習するとか、定着させるということではなく、全く切り離れた内容で、絵本、それから、歌やチャンツ、カードゲームという3種類を用意しまして、学級担任が行うという方法をとっておりました。

絵本については、イギリスの国語の教科書として使用されています、『Oxford Reading Tree Big Books』という大きな絵本、それから、ちょっと小さいのですが、この小型絵本をPDF化しまして、各教室の大型テレビに映るようにしまして読み聞かせができるようにしております。

ただ、こちらについても、やはり、先生方の不安は、自分の英語を聞かせて、それを子どもたちが真似したら申し訳ないという気持ちがどうしても強いようで、そういった先生方のために、音声ペンという、シールをタッチしたら本文を読んでもくれるペンをクラスに1本用意しまして、お渡しをしていたところです。

平成29年度、昨年度については、子どもたち同士でも読み聞かせができるように、ペンを8セット各教室にお配りして、ペア読みをしたり、1人は読み聞かせをしたりという活動ができるように教材を配備しておりました。

それから、教材研究に非常に時間がかかって大変だというお声もたくさん聞きましたので、オリジナルの指導書を業者さんと一緒に作成をいたしました。

特に、先生方が必要としていらっしゃったのが、この絵本の簡単なあらすじと、それから、文科省も絵本については、子どもたちと英語でやりとりをしながら学習してくださいと言っているのですが、なかなか質問が思い浮かばないということがありましたので、例えば、この『At the Seaside』という絵本であれば、こういった質問をすると良いですよというような、読み聞かせのガイドというようなものも付けてお渡ししておりました。

ただ、一気にたくさん教材が学校に届いても、どう使えば良いかわからない、さあ、これだけ用意したからやりなさいと言われても、なかなか難しいということで、各学校に業者の方と、それから、学校教育課の担当の指導主事が放課後に出前研修に行きまして、バックアップ研修というものを行いました。

どこかに来ていただいて研修をされるとなると、子どもたちを置いて自習にして行かないといけなくなり、そうすると学校から出づらいということで、学校に出向いて、実際に教材を使って研修をするということをしてまいりました。

先に、教員アンケートの結果に移りたいと思います。こういった研修の結果、まず、「学級担任が英語の授業を主導することについて自信がありますか。」という、一番左側のグラフですが、「とっても自信がある」「自信がある」と回答してくださった先生方の割合が、平成27年度が青いグラフ、平成28年度が黄色いグラフですが、「自信がある」と回答した先生の割合が増えています。

それから、「ALTなしで一人で授業をすることについて自信がありますか。」という問いについては、大幅にアップをしています。

これについては、45分のコマ授業だけではなく、ALTも入ってもらえない短時間学習の授業を一人ですするという経験を日々積み重ねてきた結果かなと思っています。

それから、バックアップの研修で、実際にどう教材を使えば良いかということを研修してきた成果ではないかなと考えております。

さらに、最後、「授業で英語を使用することへの自信」、これについては、伸びてはいますが、一番低いです。ここについては、現在も課題であると考えているところです。国に先駆けてやっていますので、今、全面実施の直前を迎えて、日本全国の小学校の先生方が不安に思っていることではないかなと考えています。

この部分について、先生方が自信を持って授業をしていけるように、環境を整えたり、研修体制を整えたりするということが、どの市町も必要ではないかなと考えています。

それから、こちらは、独自テストの結果になります。独自テストといいますのは、オックスフォード大学出版局と大津市教育委員会で、リスニングとスピーキングのテストを作成いたしました。そのため、英検であるとか、GTECのように、ほかと比べることができないものではないのですが、37全ての小学校で、1年生から6年生までが実施、取り組んで参りました。

特に、スピーキングテスト、話す力のテストについては、高学年だけで行っておりますが、これは、まだ平成28年度の結果までしか入っておりませんが、9割近くの高い数値でした。ただし、課題については、今後、教科化されると、読む力や書く力への学習指導への対応が必要となってまいりますので、そういった学習指導への先生方の研修等が必要になってくるかと思っています。

パフォーマンスのテストについては、教科化の後も必要になってまいりますので、このテストが、ALTと学級担任の先生がタッグを組んで、ALTが質問をして、学級担任の先生が評価をして、時々ヒントを出したりしながらやっていくというやり方をとっています。

そうすることで、学級担任の先生方が安心されます。自分が英語を使いながら子どもの英語を評価するという事は非常に難しいことですので、安心してテストを実施し、落ちついて評価をすることができたというご意見をいただいています。

それから、先ほど少し申し上げました、平成30年度、今年度以降の大津市の使用の教材についてですが、1・2年生につきましては、このままオックスフォードの教材を使用しております。『Let's Begin』という教科書です。

それから、3・4年生、5・6年生につきましては、国の新教材をメインとして使用し、副教材としまして、オックスフォード教材を活用しています。例えば、「How are you?」という表現を学習する単元でも、オックスフォード教材にもたくさんの歌やチャンツが載っておりますので、そういった幅を広げるという使い方をいただいています。

平成32年度以降については、5・6年生は検定の教科書が出てまいりますので、そちらを主として使用し、オックスフォード教材は、今年度どおり、副教材として使用してまいります。続きまして、中学校の取組に移ります。

こちらは、平成28年度時点での大津市の中学校の英語担当教員の内訳になります。左側は、男女の別。右側は、年代別の内訳です。非常に英語科の先生の数が多くて、たくさんいらっしゃるのですが、この英語科の先生方の英語力の向上ということにスポットを当ててまいりました。

英語担当教員の英語力の状況、これは、国の調査をもとにしておりまして、平成28年度までしか出ておりませんが、文部科学省の求める英語力について、達成している教員の割合です。青が大津市。平成27年度、平成28年度、余り変わっていないのですが、国の目標が50%であり、そこには、もうあとちょっとです。

ですので、英語教員の英語力向上のために、海外の集中語学研修、フィリピンのセブ島での研修について企画をいたしました。これは、平成28年度と平成29年度実施をいたしました。中核英語教員、コアイングリッシュティーチャーと呼んでいます。プロジェクト会議のメンバー、研究実践校の教員を含むと書いてあるのですが、セブ島への研修派遣と並行しまして、小学校で話す・聞く力を伸ばしてきた子どもたちが、中学校でも、その

2つの技能をより伸ばしていけるようにということで、中学校で実践型英語授業研究開発という事業をもう一つ立ち上げまして、その指導案の開発のプロジェクト会議のメンバーの英語科の教員や、その研究実践校の教員を含むという意味です。

セブ島での集中語学研修については、2週間の滞在で1日10コマ以上、マンツーマンの英語の授業を受けていただきました。本当に、頭が沸騰するかなのような大変な毎日だったと先生方はおっしゃっていました。英語科の専門の先生でいらっしゃるのですけれども、やはり、日本で生活をしておりますと、なかなかそんなに英語漬けになるという機会がないということで、学生時代以来、久しぶりにフルで英語の脳を活躍させて、本当に良い日々であったと言ってくださっていました。

先ほどの、もう一つの中学校における実践型英語授業研究開発事業とリンクをさせまして、セブ島で語学研修を受けた教員がプロジェクトのメンバーに入り、中学校でオールイングリッシュの授業を、ALTとのチームティーチングで行うということを基本に、指導案、それから、教材などを研究開発するというプロジェクトを立ち上げております。

中学校では、140時間の英語の時間がございますが、そのうち、天津市では、52時間はALTが各クラスに入れるように人数の配置をしております。

ただ、学校のクラス数、それから、規模、特別教室の使用等の配置によっては、クラスによって多少ばらつきが出ますので、ALTが確実に入れる時間数は、年間1クラスにつき20時間、ここは確実に入れますので、20時間分のALTと英語科教員とのチームティーチングの授業、これを指導案化し、教材を作成をしまして、現在、3年目の実践をしているところでございます。

こちら、2つの中学校がモデル校になっていて、開始の年の1年生を対象に、10時間分を実践し、残りの10時間分については、作成したものを参考に実践なしで作成をして、次の年に18校に広げるというように、少しずつ実践をしているところです。今年度は、3年生の10時間分を作成し、次年度に18校の3年生に広げるということを予定しております。

この実践型英語授業についての年次の計画が、このスライドになります。小学校で行ったオックスフォードとの連携した授業については、昨年度で一旦終了をしております。その子たちが、今、現在中学校に入学をしておりますので、今年度GTECという4技能をはかるベネッセのテストですが、これを中学校1年生、それから、中学校2年生に悉皆で実施をする予定でおります。

GTECについては、「話す」、「聞く」だけではなく、「読む」、「書く」というところもしっかり評価をすることができますし、また、授業改善に生かせるようなレポートを返していただけるということで採用をしております。

昨年度は、小学校6年生の希望者のみ、それから、中学校1年生の希望者のみ実施をしております。

中学校における実践型英語授業についてですが、これは、先ほどのセブ島に行った英語教員と、それから、ALTの派遣会社であるインタラック、民間業者とが連携をしまして、そこに市教員の担当指導主事も入りまして、一緒に教材や指導案を作成をしております。

子どもたちにアンケートを取った結果ですが、Q1は、「英語をもっと話せるようになりたいという気持ちになった」からQ2の「聞き取れるように」、Q3の「読めるように」、Q4の「書けるようになりたい」というふうに尋ねたところ、右下のアンケートの結果にもあるとおり、9割以上の生徒が前向きな気持ちでいるということがわかりました。

一方で、「書けるようになりたい」とか、「読めるようになりたい」、ここについては、「話せる」、「聞く」というところよりも10%前後の開きがありまして、やはり、中学校の生徒たちは、定期テスト等もございますので比重が重くなる、「読む」「書く」力をより伸ばしたいと考えているのではないかと推察しているところです。

こういった結果を踏まえて、「話す」「聞く」という小学校で身につけてきた力を、より伸ばすことはもちろんですが、そこに偏らずに表現の幅を増やすということでも、4技能をバランスよく指導することが大事と考えて、今、3年生の指導案についても作成をしているところだと聞いております。

ALTと英語科の先生が英語をたくさん使うのではなくて、生徒たちが、いかに英語を使う時間を増やすかということが、オールイングリッシュ授業の成功につながるというふうに考えて進めてまいりました。

小・中学のつながりを意識するということなのですが、まだ、これは本当に始めの方に小学校、中学校の先生方にお話をした内容ですが、小学校について大事にして欲しいところは、「聞かせる」、「繰り返す」、「再生させる」、「使う場面をつくる」、「ほめる」、この5つを意識してくださいとお伝えをいたしました。

ともすると、どうしても外国語の授業については、歌ったり、話したりと、アウトプットの場面ばかりを大事にしたりしてしまいがちなのですが、良質な音をたくさん聞かせる、集中して聞くという場面を作るといこともとても大事ですし、使う場面を作る、いきな

りお天気を尋ねるような場面というのは、日常生活には余りないので、場面設定をしまして、例えば、遊ぶ約束をして、雨が降っていたら中で遊ぼう、晴れていたら、外に行こうねというような約束ができるような場面、使う場面を設定して学習を進めていこうということをお伝えしておりました。

それから、中学校の先生方には、そういった子どもたちは小学校で音を中心に学んできていますので、曖昧さから、文字を頼りにした正確さへ移行すること、それから、会話の往復を意識すること、自己表現の活動を増やすことを大事にしてくださいというふうにお伝えをしています。また、これは、今もバージョンアップしているところです。

それから、小中学校に共通することについて、ALTについてです。配置人数の推移なのですが、平成27年度は、この小学校のモデル校での実践が始まりましたので、30名に人数を増やしまして実施をしまいいりました。平成28年度は、モデル校が無くなって全部の学校で実施をすることになりましたので、一旦、26名に戻しております。

ただ、平成29年度、昨年度については、移行期間も見据えまして、より子どもたちに英語を使う必然性を生む場面をたくさん作りたいということで33名を増やしております。

今年度につきましては、学級数の減もございましたので1名減で、平成29年度と同じ時間数配置ができるような人数にしております。

やはり、日本人の教員ですと、どうしても日本語が通じるということが子どもたちに分かってしまいますので、この先生に英語を使いたいという気持ちにさせることがなかなか難しいのですが、ALTの先生方がいてくださると、何とか英語で伝えようという場面が、日常で授業以外でも生まれてきますので、その点、とてもありがたいと思っておりました。

ただ、特に小学校においては、ALTの先生は、英語の授業をしてくれる人だというふうに全面的に頼ってしまうところもございましたので、小学校だけかなと思っておりましたが、中学校についても、実はそういったところがありましたので、少しの意識で授業が変わるということで、ALTは、あくまでもアシスタントだよということを常にお伝えするようにしてまいりました。

JTE (Japanese teacher of English)、日本人の先生が授業をリードするということ、それから、シンプルな英語で子どもたちの理解を促すということ、それから、日本人の先生が授業を振り返って、次の時間につなげるという、この3つを大事にしましょうということを常にお伝えをしているところです。

このようにして、中学校も小学校も、環境改善と、それから、授業力の強化、教員の英

語力の向上、この3つに特化をして進めてまいりました。

環境改善については、小学校は、先ほどのように、教材、それから、指導書の準備、先生方が教材を作らなくても良いように充実をさせること。中学校については、オールイングリッシュ授業の指導案やパワーポイントでの教材の作成。それから、ALTの効果的な配置、連携。こうしたことで環境改善を行ってまいりました。

授業力の強化については、先進校の視察もそうなのですが、英語による授業の推進で公開授業を行って、他の先生方に見に来ていただくということもしております。

中学校については、海外派遣研修の実施。それから、英語力検定試験の助成というのも行っております。これは、小学校においても行っています。

小学校の授業力の強化と英語力の向上については、先ほど申し上げました、放課後のバックアップ研修の継続と充実。大津市では、外国語教育政策アドバイザーも雇用をさせていただいておりますので、そういった方にも来ていただいております。

それから、先生方の希望研修、こういった内容で研修をしたいというお声を伺って、ALTの派遣会社のインタラックや、それから、オックスフォード大学出版局のティーチャートレーナーの先生方など、いろいろなところから講師をお呼びして、すぐに使えるアクティビティーや絵本の読み聞かせ、教室英語など、力を伸ばしたいジャンルに応じて選択できるような研修内容を工夫してまいりました。

子どもたち自身が使う良質な教材を用意するというのも大事だと思うのですが、何より、先生方が自信を持って授業を行うということで、子どもたちの力は伸びていくと信じておりますので、これからも、私たち教員が自信を持って授業ができるようにしっかりと研修にも努めてまいりたいと思っておりますし、こういった、希望研修が充実すると良いなど思っています。

以上で、私の発表を終わらせていただきます。ありがとうございました。

(拍手)

○企画振興部長 先生、どうもありがとうございました。先ほど、小松職務代理者からもありましたように、先に説明いたしました本市の英語教育につきまして、また今ほどご講演がありました、大津市の英語教育につきまして、何かご質問等ございましたら、よろしくお願ひしたいと思います。

○本田委員 宮塚先生、今日はありがとうございました。4月から城西小学校に変わられたということで、大津市の英語教育のことについて今説明をいただいて、大変分かりやす

く聞かせていただきました。

4月からで、まだ半年も経っていないと思うのですが、大津市の英語教育と、彦根市に来られてからの比較ではないですけども、感想をお聞かせください。彦根でも、先ほど学校教育課の先生からお話があったように、もう長いこと実践というか、実践に役立つような研究とかも進めているのですが、そのこととも比較して、どうかということをもまず1点。

講演の最後に、海外の語学研修とかのお話があったのですが、ほかのバックアップ研修とか、希望研修とか、すごくお金のかかることというか、投資が必要なことというか、やはり、教育にはそれなりの投資がないと、なかなか未来の子どもたちに力をつけるというのは難しく必要なことですので、そのあたりとかも、どんな状況なのかということを知りたいです。

さらに、もう一つ、小学校の教員と中学校の教員の交流というのを、大津ではどの程度、どんなふうに行われていたのかについて、教えてください。

○宮塚江理氏 まず1点目の、彦根市に来て大津市と比べてどうかということなのですが、大津市では、英語の指導主事になったのですが、自分がこうしてオックスフォードの教材を使ってくださいねって行って研修してきたにもかかわらず、それを使うことなく彦根市にやってまいりましたので、これを使用してどうかということとは比べられないのですが、私が、城西小学校に来て、まず、すごいなと思ったことがたくさんあります。

城西小学校さんも、恐らく、教育課程特例校でやってきていらっしゃるし、英語がお好きで得意な先生もたくさんいらっしゃいます。だからでしょうか、子どもたちが、英語を使うことに対して全く抵抗がない。高学年の子どもたちでも。それが素晴らしいなと思いました。

それから、環境が整っていて、さっき学校教育課の主幹が言っておられた掲示物についても英語で掲示されていたり、今月のフレーズというものが決まっていたり、毎週金曜日は、先生たちも英語を使いましょうねというようなことが、どの先生も意識してされているということが、本当に素晴らしいと思いました。

それから、5分間の動画についてなのですが、私は、噂には聞いておまして、見たい見たいと思っていたのですが、やっとこの彦根市に来て見ることができました。とっても、本当によくできた動画で、先生方に負担がなく、見ているだけで何を学習するかということがよく分かります。これは、城西小学校はきちんとされているので、全ての彦根市の小

学校できちんとされているのであれば、子どもたちにそれが積み上がってきているのがよく分かりますので、大変素晴らしいなと思っています。

余り比較すると良くないのかも知れないですが、やはり、動画を流すだけというのは、とても先生方にとっても気持ちが楽ですし、さらに、それが良質な内容ですので、それを見て、何が大事なポイントかということを経験が捉えて復習をさせるということがやりやすいです。絵本を読み聞かせしなさいとか、この歌を教えなさいということよりも、先生方の心理的な負担も少なくできるので、これは、続けるべきだなと思いました。

私は、今、城西小学校しか知らないものですから、他の学校でどのようにこの5分間の動画が取り扱われているかということがわからないのですが、うちの学校のように、どの先生もきちんと大事に取り組んでいるのであれば、やはり、6年間で物すごい量のインプットになります。子どもたちは耳がとても良いので、私たちをはるかに超えた良い発音でALTの先生とやりとりをしています。この動画は、ぜひ大事に広げて行って欲しいと思っています。

それから、2点目の研修予算のことについてなのですが、やはり、教員研修にかかるお金はとても大事だなと思っています。一番先生方が不安に思っているところは、そんなに下手くそでも何でもないのですけれども、やはり、自分の英語、特に発音が不安であるところがとてもとても根強いので、そういう不安を払拭していくためにも、教員研修は大事だなと思っています。

今、全面実施を控えた直前であるからこそ、先生たちもより自分の力を伸ばしたいという気持ちが、今、とても高まっているので、そういった研修を設定することで、たくさんの先生たちが自ら学びたいと思って力を伸ばしていられるのではないかなと思っています。

うちの学校には、ありがたいことに、県の英語専科の先生も来てくださってまして、さらに言いますと、英語の得意な先生も何人もいらっしゃいます。ただ、そういった先生方がいらっしゃっても、ほかの先生方にその力を分け与えていく、そういった研修をしている時間がなかなかないこともありますし、うちの学校だけが充実していても、ほかの彦根市の小学校がどうかということがやはり分かりません。英語専科の先生も、多分2名なので、全ての学校をカバーできているわけではないです。ですので、教員研修や、それから、そういったALT等にお金をかけていくことはすごく大事だなと思います。

それから、3つ目の小・中の交流につきましては、大津市では、小学校の公開授業、それから、バックアップ研修、放課後の研修等も、中学校のブロックで、中学校に声をかけ

て、中学校の先生が小学校の授業を見に来てもらったり、どんな教材を使うかという研修をしたりするということをしておりました。

それから、小学校で使用している絵本については、中学校の先生が特に授業で使いたいというお声がたくさんありましたので、18中学校に、小学校が使っているものを1セットずつお渡しをして、特に、中学校1年生の英語の授業で使っていただけるようにしています。

そうすると、子どもたちも、中学校で文字をよりしっかり学習をしますので、内容が何となくしか分からなかったものが、中学校に行ったら正確に分かったぞという経験を積むこともできますので、そういったこともねらいとして、教材の交流と人の交流と、両方進めてもらうようにしておりました。

○小松職務代理者 どうもありがとうございました。私は、実態はよく分からないのですが、実は、小学校の英語の先生なり、小学校で英語を教えるということに対しては、今までやってなかったのが、本当に大丈夫なのかなというような、個人的な不安はあります。

今、聞かせていただいて、彦根市と大津市の違いを見ますと、ALTの数です。大津市さんは、平成30年度で32名。学校の数が37校なんですね。彦根市の小学校は、17校なんです。今、彦根市は7名なんです。大津市の割合からいくと、倍の約14名ぐらいないとバランスが合わない。今、彦根はこの半分ぐらいのALTでやっているということなんです。

それは、ALTというのはアシスタントであるわけで、彦根の先生の力があるからいけているのか。その割には、今度の彦根の要望の中には18名ぐらい欲しいという、先ほどの要望の中身にもあったのですけれども、やはり、ALTの先生のレベルと、ALTの数の問題。それと、もう1点それに関して、小学校の教員のアンケートです。これで授業を自信を持ってする、できると言われている先生は、21%から25%です。4人に1人です。これは、僕は正直、物すごく少ないなというイメージを持ったのですが、草津市でも、今、これぐらいの思いなので、多分、彦根市も同じぐらいかなと思っているのですが。

そういう意味で言うと、ALTを何人ぐらい要するというのと、小学校の教員の先生のレベルというのをどこまでもっていくのかというのを、測る指標というものが要るのかなと思う。これは、中学校ではありましたよね。小学校の先生の英語のここまでいったら良いという、そういう基準というものはあるのでしょうか。

それが無いのであれば、何かの形でALTの人数と先生とのレベルみたいな、そこが分

からないと、単にALTがたくさん欲しいと言っても、先生のレベル的にはちゃんと高く
てできるのであれば要らないと、私ちょっと感じました。今、大津市というのは、ALT
の数は、彦根市に比べて倍おられ、それで、ちゃんと英語教育をやられている。彦根もや
っていると思うんですけども、小学校先生の能力の定量化ではないけれども、これはど
う判断されているのでしょうか。そこをちょっと、もし分かれば教えてもらえますか。

○宮塚江理氏 まず、1つ目のALTのことについてですが、実は32名、33名という
のは、小学校のみではなくて、小・中学校合わせて32名という配置なのです。55校に
32名を配置しているということです。ただ、中学校の140時間のうち、平均50時間
はALTも配置できるように、それから、35時間のうち32時間はALTが入れるよう
に人数を配置しています。

中学校は、もちろん、英語科を専門とする先生なのですが、ALTがいなくてもやって
いけるのかというと、いなくてもやってはいけるのですが、先ほども少し申し上げたよう
に、やはり、日本人に対して英語を使おうという気持ちになかなかならないことと、本当
の英語のコミュニケーションの相手になるという意味で、やはり、ALTの存在はとても
大きいなと思っています。

それは、小学校についても同じように言えることで、どんなに英語が堪能な先生がいら
っしゃっても、やはり、英語を使う必然性が生まれる相手はやはりALTであり、モデル
になるのも、ALTの方を真似しようと子どもたちはしますので、ALTの存在はすごく
大きいなと思っています。

○小松職務代理者 私は、余り中学校ではALTは行ってないと思っていました。小学校
だけと思っていました。

○宮塚江理氏 いえ。中学校にも行っております。

○小松職務代理者 あと、小学校の先生はどうですか。レベルを測る指標みたいなものは
ありますか。

○宮塚江理氏 国が求めているのは、中学校の教員はここまでというような指標はあるの
ですが、小学校については設けられていません。これは個人的な考えですが、小学校も中
学校もと言ったらちょっと語弊があるかも知れませんが、英語力はもちろんなのですが、
どちらかという、授業力というか、授業の構成力とか、それから、この表現や語彙を、
どういった場面で使うというような設定の力とか、そういったものの方が重要になるのか
なと思っています。ただ、先生方の不安としては、自分の英語力が不安であるということ

なので、やはり、ご自身の英語の発音とか会話力、とっさの一言が出るような力を高めたいというふうに思っているから、そういった力を伸ばせるような研修が必要かなと思います。ただ、小学校の先生も必ず英語を準1級が必要だとか、そういったことは必要なのではないのかなと個人的には思います。今、採用試験等では、優遇されていると聞いていますが。

○小松職務代理者 これは、平成28年なので、いろいろレベルも上がっているのだと思いますが、少し、その辺の先生の実力みたいなやつをどう高めるか、どう評価するかというのは、何か要るのかなという感じはちょっとするんですよね。

○宮塚江理氏 国の調査は、小学校も同じように準1級を持っている先生と同じ調査は行っています。ここには出していないですけども。

○市長 小学校の教員免許を取るのに、大学の教育課程でどれぐらいの英語学習をするのですか。

○宮塚江理氏 まず私の世代では、一般教養として英語の勉強はいたしました。小学校の教授法、指導法として小学校初等英語教育法みたいなものはありませんでした。ただ、今は大学ではカリキュラムは変わってまいりまして、そういったところはきちんと指導法等も含めて学べるように変わってきています。

○市長 どの程度なのでしょう。

○宮塚江理氏 採用試験でも英語の面接がありまして、今年度受ける子にも聞いたところ、去年から入ったそうなのです。簡単な英語のようで、簡単な英語って、どんなのって聞いたら、「週末、何していましたか。」って尋ねられて、それを英語で答えるようなものなのです。「What did you do on last weekend?」みたいに聞かれて、「映画を見ていたよ」とか、そういったことを答えるような試験もあると耳にしました。そういった、一定の会話力等をクリアした人が、今度は小学校の教員になってくるはずですよ。

○永濱委員 今日はありがとうございました。具体的な例を教えてください、ちょっとイメージできるかなという感じになっているのですが、先ほど、各委員の質問で、特に本田委員から質問された具体的なお金の事情というのがあり、一人の教員に幾らかけて研修に行かれたか、また、年間、何人ぐらい行かれたかとか。行かれるのは大抵夏期休暇であるとか、ある程度集中した休暇の時期だとは思いますが、それをいつでもいいので、教育委員会に教えていただければありがたいなと思います。

そして、ALTに関しても、単に学校数だけではなく、問題はクラス数で、正規クラ

スに対して何人かというのが、実際ALTが充足されているかどうかという目安だと思うので、そういう点からは、彦根市に5クラスという現状、現時点でのALTと、また、大津市のALTの活動、小・中学校からした学級数ですね。そちらの方で、また比較して、当教育委員会か教育委員にお示しいただければありがたいなと思いました。

ここから質問で申しわけないです、大津市では、「話す」「聞く」「読む」「書く」という大きな4つですね。GTECでも求められる。今後、大学入試でもどんどん採用されていくと言われてはいますが、この中で、小学校は、主に「書く力」というのは、中学校にお任せするというスタンスなのでしょうか。これが1点です。

あと、平成30年度以降の使用教材につきまして、以前からのオックスフォードの教材に加えて、国の新教材をオックスフォードを副教材にしていくと言われてましたが、これは、今までの授業時間とまた国が定めた教科として時間が増えますよね。それで賄えるという予想で副教材、両方すごくボリュームミーな感じがあるのですが、これは、どのくらいできるのですかというのが2点目です。

ちょっと他の委員も質問されたので、他にもありますけど、GTECの受験についてです。これも受験料がかかると思うのですが、この辺も人数と何百円単位なのか、何千円単位なのかがわかりませんが、その辺をまた教育委員会に教えていただければ、具体的に市長にお願いするとかいうときに説得力のある数字として出せると思いますので、また、それは後のことなのですが、お願いします。大きく2点です。

○宮塚江理氏 まず1つ目の4技能のうちの「書く」については、中学校にお任せですかというご質問なのですが、実際、今年度は移行期間でまだ全面実施ではないですし、外国語活動というままで、書くということについては、できるということまでは求めていきません。もちろん、全面実施以降も「書く」については、できるということまでは求めてはいかないですけれども、小学校で、文字にたくさん触れるということはとても大事だと大津でも考えておりましたので、オックスフォード社のテキストにはたくさん、『ハイレブズ』よりも文字が使われています。アルファベットの大文字、小文字については、アルファベットの読み方がきちんと分かるように、例えば、大文字のAが出たら、これは「A」というふうに子どもたちが分かるようにということまではきちんと指導しましょうとお伝えをしてきました。

ただ、自分が好きなものであるとか、そういったことを文章で書く、センテンスで書くということは一切しておりません。やはり、「話す」ほうで重点的に音声化するというこ

とを大事にしていますので。そういった音声化が十分にできるようになったものを、実際に書くということについては中学校で行うように、今年度もしてもらっています。

それから、2点目の副教材の扱いについてですが、これについては、現場の先生方からも、実は、移行期間もオックスフォードの教材をそのまま使いたい、慣れてきたし、もう指導書もあるしやりたいというお声もあったのですが、国の新教材が次の教科書のある程度モデルになるということですので、やはり、この内容をしっかり先生方も学習して、それから、現5年生かな、この子たちが、新学習指導要領で高校の受験に臨むことにもなりますので、やはり、新教材の内容をきちんと踏まえておくということは大事だろうということで、今年度、来年度は新教材をメインに使いましょうということになりました。

副教材として扱うというのは、同じように単元を増やしていくという扱いではなく、例えば、『What do you want?』という新教材の単元があったとしたら、同じく『What do you want?』というフレーズを扱っている歌やチャンツ、それからアクティビティがオックスフォードの教材にもありますので、活動の幅を増やすという使い方で副教材として使ってもらっています。なので、時間数を増やすというのではなく、同じ1時間の中で併用するというふうにしています。

特に、ALTがオックスフォードの教材に非常に精通しておりますので、先生は、新たな学年で新たな単元というふうになるのですが、先生に対して、ALTが「この単元だからこの歌を使えるよ。」というふうにアドバイスをよくしてくれますので、そういったティームティーチングをしながら、副教材として扱っています。

GTECの受験料については、今、大津市のホームページに資料があります。今年度、もしかしたら変わっているかも知れませんが、悉皆の受験で全額負担市がするのではなく、一部自己負担980円を保護者に負担をしていただいて、残りのお金を市で負担をしております。ちょっと、1年生と2年生でGTECの金額が違いますので、その点については、正確な金額をまたお調べしてお伝えしたいと思います。

○小松職務代理者 半額負担ではないのですか。

○宮塚江理氏 いえ。半額ではございません。去年、希望者のときは半額負担だったのですが、もっと、4分の1だったか。ちょっとそこも確認します。もっと少ないです。

○小松職務代理者 自己負担が、もっと少ない。

○宮塚江理氏 はい。もっと少ないです。自己負担を少なくしました。

○永濱委員 ありがとうございます。

○企画振興部長 ほか、質問はよろしいですか。

○小松職務代理者 もう1点だけ。この予定表を見て、平成32年には、特定教科の削減はないとか、土曜日の活用とか、表記週間の設定の工夫とか、これ、今英語を入れることによって先生の負担になるような項目ですよ。

今、先生の働く時間を少なくするということに対して、相反するような項目になっているんですけども、どうなのでしょう。この英語教育というのは、やはりかなり時間をとっていくと。それで、他のやつは減らさない。先生の時間は、やはり、授業の時間は長くなると。もうそれは仕方ないという考えなのですね。

○宮塚江理氏 これは、大津市の方針ではなくて、文科省の考え方です。今、この移行措置期間については、総合的な学習の時間を15時間減じて良いと国からは言われております。ただ、2年間終わったら元に戻しますよと言われております。なので、各学校で、各市町で時間を工夫して生み出してくださいと言われてました。

大津市では、昨年度末の段階では、今、現在とっている短時間学習の枠を、例えば、15分に増やして週3回とったら、45分になりますので、そういった授業時間の確保の仕方です。70時間をとっていかうと話が出ています。そうやって土曜日とか長期休業は削らずにやっていかうという方針で、昨年度は終わっています。また、違う話ももしかしたら出てきているかもしれませんので、また、様子を聞いてみたいと思っております。

ただ、多くの市町さんの話を伺っていると、やはり、夏休みを5日間減らして授業時間を確保するとか、そういった方法を探られるところが多いとは聞いています。

○企画振興部長 そのほか、何かご質問等ございませんでしょうか。

○西川委員 すみません。今日はどうもありがとうございました。いろいろ聞かせていただいて、難しい内容で、これからの子どもたちも大変だなというのを感じさせてもらったのですが、どの子どももやはり、興味を持って楽しんでます。新しい項目ですので、この頃の子どもたちは興味関心を持ってどんどん伸びていくと思うのですけれども、それでも、やはり、ちょっと苦手だなという子どもさんもあると思うのですけれども。そういう子どもたちの対応というのはどうしておられますか。

○宮塚江理氏 特に、コミュニケーションの教科ですので、やはり、日本語でも英語でも、自分から発信することが苦手だなという子ども中には見られますが、英語になると、日本語では尋ねないような内容を友達にインタビューしたりすることがあります。

例えば、同じクラスになって今さらですけども、「誕生日はいつ。」だとか、「好き

な色はなあに。」とか、「好きな動物」とか「好きなスポーツはなんだ」ということで、英語だからこそ、友達に尋ねて新しい発見をするという活動を仕組むことができるので、それこそ、コミュニケーションを取ることが苦手だなと思っている子の前向きな気持ちを促すというか、聞いてもらえて良かったなとか、新しく知れて嬉しいなということが経験できるのも、英語の良いところだなと思っています。そういったところを大事に、スキルの部分だけではなくて、友達のことを発見できて嬉しいなとか、聞いてもらえて良かったなという経験が純粋にできるのが英語の良いところだと思います。そういうことを、教師の方が意識して授業をすることが大事かなとも思います。

○西川委員 ありがとうございます。大人は、どうしても何か新しいことに対して難しいなってしまうのですけれども、子どもたちは、そういうところを伸びていく、伸ばしていくというのがあるのですね。ありがとうございます。

○宮塚江理氏 「ブドウ好きやったん。知らなかった。」っていうふうに、この間、うちのクラスの子たちも言っていましたので。やはり、5年間付き合ってきてても新たに発見することが英語の授業ではあるというのがすごく楽しいなというふうに、私も見ていて思いました。

○企画振興部長 ありがとうございます。最初にお断りしまして、時間も近づいておりますが、何か、意見等ございませんか。

○市長 生徒のアンケート調査で、英語による授業が英語力を伸ばすのに役立つと思わなかった生徒もおりますけれど、こういう人たちは、どのような思いがあるのか、その分析はされていますか。

○宮塚江理氏 私が知っている限りは、そこの分析ができていないかなと思いますが、中学校担当の英語の指導主事と、それから、モデル校の先生方の間では、もしかしたらお話があったかもしれませんので、また確認をさせていただきます。

○市長 セブ島への語学研修は、なぜセブ島だったのでしょうか。

○宮塚江理氏 一番、民間の企業でもフィリピンのセブ島への研修がたくさんされているということと、それから、非常に日本から近いということです。あとは、どうしても観光地的なイメージがあるのですが、本当に、朝から晩まで英語漬けで学習する環境が整っているということで、セブ島を選んだというふうに私は認識をしております。疲弊して帰っていらっしやいましたけれど。

あと、欧米と比較してやはり安いということと、それから、ボランティアのプログラ

ムを、セブ島の語学研修の学校については組まれていますので、語学研修だけではなくて、現地の小学校に行って、子どもたちと触れ合うというような機会もあるということです。

それから、研修の成果を前後でテストを実施して、しっかりと評価をするということがプログラムに組まれているということも、理由の一つでした。

○市長 トータル何人行かれたのですか。

○宮塚江理氏 平成28年度に4名。昨年度に3名です。

○企画振興部長 他によろしいでしょうか。

○小松職務代理者 今日のこの総合教育会議のまとめというか、アウトプットのお願いです。彦根市の今の状態ということで報告もいただいたのですが、これから平成32年度に向けて、やはり、準備するところでいろいろ費用の問題、お金の要る問題も出てくると思います。今のままで、小学校の英語教育がスムーズにいけば費用もそんなに使わずに、ALTも増やさずに、今の彦根はいけそうということであれば、良いと思うのですが、そうではないので、この総合会議にあがってきたと思っています。やはりその順位的に費用がどういうところで使わなくてはあかんというか、英語力を上げるために必要なこと、その整理は、今までの過去の英語教育の成果とともに、次の課題として少しまとめてほしいなと思います。

今は、いろいろ彦根市もお金の無い時なので、枠組みの中で考えていかなあかんとは言いながらも、やはり優先順位は決めなければいけません。私は、特に今小学校だと思っているのですが、小・中ですかね。そこにおける、今、大津市さんの話も参考にして、彦根は彦根で、少し課題をもうちょっと我々教育委員にも分かるような形で確認してほしいなというのを感じました。それが、また今度予算のところで話ができたら良いなと思います。

○企画振興部長 今ほどありましたように、次のステップに向けましての取組とか、ちょうど予算の話が3回目にありますので、また教育委員会で整理をしていただいて、3回目の予算の時に、またそういったことのフィードバックをお願いするということにさせていただきたいと思いますので、よろしくお願ひしたいと思います。

お約束していた時間が近づいておりますが、最後に、何かよろしいでしょうか。

それでは、市長から本日ご講演いただきました宮塚様に対しまして御礼申し上げますので、よろしくお願ひいたします。

○市長 宮塚先生、本当に今日は貴重な時間を頂戴し、ご講演いただきましてありがとうございました。今後とも、また現場で英語教育の推進に、よろしくお願ひしたいと思いま

す。どうもありがとうございました。

○宮塚江理氏 ありがとうございます。

○企画振興部長 ありがとうございます。本日、ご講演いただきました宮塚様におかれましては、大変お忙しい中、貴重な時間を頂戴いたしましてありがとうございました。

それでは、最後に御礼を込めまして、皆様の拍手をもちまして御礼に代えさせていただきます。ありがとうございます。

(拍手)

○宮塚江理氏 ありがとうございます。

○企画振興部長 ありがとうございます。最後に、その他の事項でございますが。次回の総合教育会議は、先ほどスケジュールでもお話させていただきました、10月下旬に開催させていただきたいと考えております。また、詳細な日程につきましては、調整の上、後日お知らせしますのでよろしく申し上げます。

それではこれもちまして、平成30年度1回目の彦根市総合教育会議を終了いたします。ありがとうございます。

(終了)